

森林での「遊び」を「学び」につなげて 人と自然環境との共生をめざす

森の森づくりネットワーク
第13回 森の文化祭

●NPO 法人 どんぐりネットワーク【香川県高松市】
<http://www.donguri-net.jp/dnet/dnet.html>

恒例となっている「森の文化祭」には多くの人たちが参加

「どんぐりネットワーク」は、子どもたちを中心とした市民に、森林体験の機会を提供している法人格を持つNPOである。一般市民や森林所有者、行政、企業などが協力しあって、多様な人々が森づくりに参加できる環境をつくり、人と森林とが共生できる社会を実現することを目的としている。

森づくりに積極的な参加を促す取り組み

同グループの活動のはじまりは、平成5年にさかのぼる。香川県の県民参加の森林づくり事業の一環である「どんぐり銀行」の運営スタッフとして、市民ボランティアの「どんぐりスタッフ」が誕生した。そして、平成6年度には「どんぐりボランティアネットワーク」として組織化され、平成10年度にNPO法人「どんぐりネットワーク」と改称した経緯がある。

「どんぐり銀行」とは、森のどんぐりを「預金」した人に、苗木を「払い戻す」という緑化循環のシステムであり、「どんぐりネットワーク」がその運営の協力に当たっている。この「どんぐり預金」には、そこへの参加をきっかけに、市民参加による森林の手入れや自然観察、クラフトなどの体験をとおして、積極的に森づくりに携わってもらいたいという思いが込められている（平成17年度までの預金者累計15,740人）。

そしてもう一つ、「どんぐりネットワーク」のメイン事業が「ドングリランド」の管理・運営である。

森の手入れには、週末を利用して参加する家族連れも

この「ドングリランド」は、高松市西植田町にある荒れ放題になっていた森を整備・活用したもので、ここが「どんぐり銀行および森林づくり」の活動拠点となっている。また、森林と人のかかわり合いが体験できるテーマパークとしても機能しており、週末には、子どもたちや家族連れを対象としたイベント会場となることもある。

毎年10月の最終日曜日に開催される「森の文化祭」は、森とかかわるさまざまな活動団体が集まる森のお祭りである。この日、会場で使われる通貨は「どんぐり」で、お金を持たない子どもたちも、森に入ってどんぐりさえ拾って集まれば、一日楽しく遊べるしくみとなっている。

森での感動を共有するムードづくり

「どんぐりネットワーク」の活動は、約60名のスタッフが支えており、団体の年間の活動日数は280日にものぼる。どんぐり伐採や竹の伐採や、森の手入れといった作業は、自

然のもつ生命力の逞しさを相手とするだけに、時間的な猶予が許されず、ともするとハードな活動になりかねない。

しかし、楽しむことを第一義としている「どんぐりネットワーク」では、切った竹をそのまま廃材として放置するのではなく、クラフトの材料や正月用の門松として甦らせるといった「遊び心」を大切にしている。

また、森林でのイベントに参加する子どもたちや県民に対しては、森での遊びの「楽しさ」をきっかけとして、環境保護の大切さを学ぶ場を提供することに配慮し、スタッフや参加者が同じ目線で感動を共有するムードづくりを重視している。

こうした想いで「どんぐりネットワーク」が推進している「森林づくり」は、県内の教育関係者にも高く評価されており、環境教育のうえでの貴重な教材として、小・中学校の校外学習の場となる機会も多い。

さらには、活動そのものがもたらす成果として、森の周辺地域に与える刺激も大きい。「どんぐりネットワーク」の趣旨に賛同し、所有する森林の提供を申し出てくれる人や、子どもたちから「地域の森はボクたちで守る」といった声が出てくるなど、市民の自然保護への意識も高まっている。



伐採した竹を利用したどんぐりポスター



どんぐりや松ぼっくりなどを素材としたクラフト作品

担い手確保が今後の課題

こうした成果の一方で、「どんぐりネットワーク」にとって課題となっているのが、人材の確保である。

平日の活動を担うスタッフは、自由な時間を森づくりに費やす気持ちを大切にしながら取り組んでいる定年退職後の世代が多く、30代、40代などの世代の参加はまだ少ない。

この課題を解決するためにも、ボランティアセンターなどの中間支援組織との連携のもとで、十分な情報発信や広報活動といった運営面でのさらなる拡充を図っていくことも、重要なテーマとなっている。

「どんぐりネットワーク」では今後も、森林保全のための取り組みをとおして、より多くの世代を巻き込みながら、自然環境保護への想いを共有し、高めていくための交流に努めていきたいと考えている。



人の心に、大切な「木」を 植えていきたいと思っています

しら い ゆ き え
白井章江さん
NPO 法人 どんぐりネットワーク 事務局長

私自身が現在の活動にかかわるきっかけとなったのは、平成12年の春、この団体の主催する「交流の森ツアー」の広報を見て、子どもといっしょに参加したことでした。

それまでは、森はもちろん、植物の手入れなどとは縁のない生活をしていましたが、このツアーを体験して大きなショックを受けました。自然が自然であるためには、その裏に多くの人の努力があることを知った

からです。特に、森づくりの大切さを実感し、活動にかかわる一人ひとりが自分自身でできることを積み重ねてきた結果が現在の「どんぐりネットワーク」です。

私たちは現在、人と森林とがふれあうために、できるだけ多くの機会を提供していきたいと思っています。森林への関心については、楽しく遊びたい人から、ボランティア活動に参加したい人までさまざまで、年齢的にも子どもから高齢者まで、多くの異なる人がいます。

観察会のようなソフトなものから草刈りのようなハードなものまで、各種のクラフトのように趣味や遊びのようなものから林業的な森林管理まで、多様なものを、できるだけ多く提供したいと考えています。

活動を通じて心の中に「どんぐり」を撒き続け、やがてはその木が大きく、逞しく成長するように、人の心に、大切な「木」を1本1本植えていきたいと思っています。

自然保護・環境問題への取り組みについて、いま、さまざまなボランティア・市民活動が果たす役割が注目されています。今月号では、市民や関係者のネットワーク・パートナーシップを生かした活動の紹介をとおして、ボランティアや市民に何ができるのか、また、ボランティアセンターなどの中間支援組織には、これらの活動に対するどのような支援が期待され、また可能なのか、その果たすべき役割などについて考えます。

特集

遊休地を利用して、 身近な環境問題に取り組む 市民主体のエコ・プロジェクト

●足立グリーンプロジェクト [東京都足立区]

<http://www.greenproject.net/>



ヒートアイランド対策のために設けられた「キウイ棚」

区画整理予定の遊休地利用に着目

平成17年8月に開業したつくばエクスプレスの始発駅「秋葉原」から7つ目、およそ15分の位置に「六町(ろくちょう)」駅がある。

現在、この町で活動を続ける「足立グリーンプロジェクト」は、地球温暖化、ヒートアイランド、ゴミ問題など深刻化する環境問題への対応をテーマとして、平成14年に立ち上がった任意団体である。

六町地区では、鉄道計画に伴う区画整理が行われており、住宅地の中にフェンス張りの遊休地が虫食い状に存在していた。

そこで、「土地が遊んでいるのなら、生ゴミをリサイクルして野菜でもつくったらどうだろうか？」と考えた住民有志が足立区と交渉した。そして、区が保有する700坪の区画整理地を、事業の目処が立つまでの間、地域住民の憩いの場と環境保護活動の実践の場として、期間限定で活用することになったのである。

こうしてできたのが、「六町エコプチテラス」(以下、「エコプチ」)であり、「足立グリーンプロジェクト」の運営によって「実践型環境教育の場」としての成果を上げている。



環境保護活動を実践している「六町エコプチテラス」

現在、8人の役員を含む20人ほどのスタッフを中心に、192名の登録されたエコ・ボランティアが継続的に活動を行っている。さらに保育園児や小中学生、高齢者など、さまざまなライフスタイルをもった近隣住民が一般ボランティアとして参加している。年間の活動者数は延べ8,900人にもなる(平成18年)。

環境問題が「見える」「学べる」「手が出せる」取り組み

「エコプチ」では、保育園児などがじゃがいも栽培を行っている「コロッケ畑」、家庭の生ゴミを堆肥化して花や野菜づくりを行っている「エコ農園」、この農園で収穫した野菜などを使った食育プログラムやハーブ講座、ヒートアイランド対策のための「キウイ棚」



じゃがいも栽培を行っている「コロッケ畑」での収穫

の設置など、参加者のアイデアを大切にしながら、さまざまな取り組みが行われている。そして、各活動には、エコ・ボランティアを中心に、一般のボランティアも参加しながら、植え付け、手入れ、収穫などに協力していく。

生ゴミリサイクルや雨水利用、減農薬野菜の栽培をめざす「エコ農園」では、農薬や化学肥料を減らした野菜づくりが行われ、また、家庭から出る生ゴミを堆肥とすることで、二酸化炭素排出量の抑制を行う。

「キウイ棚」は、キウイの旺盛な繁殖力を利用して、葉の蒸散作用と太陽光の地表への遮断による冷却効果が目的となっている。大学の研究機関の監修のもとで12か所に温度計を設置して気温の変化を測定したところ、近隣住宅より1~3度気温が低いことが実証された。

野菜づくりを通じた環境教育を行うための体験農園として、「エコ農園」では、多くの協力者を呼び込むしくみをつくり、人集めに努力した。こうして「エコプチ」は、地域の人を巻き込んだ一大プロジェクトとして成長していった。



収穫されたたくさんのキウイを前に

運営に当たる「足立グリーンプロジェクト」では、環境問題が「見える」「学べる」「手が出せる」というコンセプトを掲げ、市民にとって身近で楽しい活動の場を提供していくことを大切にしている。

そのため、ちょっとした発案がもとで、新たな取り組みへとつながってきたケースも多い。

例えば、「キアゲハ救出大作戦」。畑では害虫として駆除されてしまうキアゲハの幼虫を、大切に育てるためにニンジン畑を用意し、育った成虫を環境教育の一環として、小学校での観察用に役立てる活動である。

市民主体のエコ活動の普及に向けて

市民主体のエコ活動の普及に向けて最も重要なポイントは、その活動に取り組む市民の熱意である。

そして、区画整理地を環境活動に活用するという前例のない取り組みであっただけに、行政サイドにも、市民の熱意と企画の先進性を見抜き、受け止め、理解して知恵を絞る人が必要だ。

「足立グリーンプロジェクト」では現在、近隣住民や行政の理解のもと、生活者一人ひとりが「足元から考えるエコ活動」を実践できる環境を提供している。



私自身にとっても、 多くのことを学ぶ場となっています

ひら た ひろゆき
平田裕之さん
足立グリーンプロジェクト代表

「足立グリーンプロジェクト」では、活動資金確保の一つとして、アルミ缶の収集活動を行っています。収集に協力していただいた方には、お礼として「エコプチ」で育ったキウイを差し上げています。今年も1万個もできたキウイがすべてなくなるほど、多くの方々の協力をいただきました。いまでは、このキウイが、「エコ」を象徴する地域通貨のような役割を果たしています。

参加しているメンバーからも、「自分の世界が広がった」「家族ぐるみでのネットワークが広がった」などの声があります。エコを媒体に始めた活動ですが、その結果として生まれてきたのは、人と人とのつながりでした。

また、単なるエコ活動ではなく、高齢者が農作業に取り組むことで介護予防の効果もあるなど、まったく違う視点での成果も出てきています。

「エコプチ」で人と人が出会い、知恵が重なっていくことで、新たな道が開けていくという、人かつながることの価値に気づかされました。

「足立グリーンプロジェクト」では、一人ひとりが頑張りすぎず、お互いにカバーし合う「60点主義」を掲げています。人も植物も、育つには時間がかかります。自分も楽しみながら、負担感を感じない活動を続けていければと思っています。



環境パートナーシップの意義と 中間支援組織が担うべき役割について

すどうみちこ
須藤美智子さん

地球環境パートナーシッププラザ

環境保護に向け、さまざまなボランティア・市民活動が展開される中、ここでは持続可能な社会づくりに向けて、あらゆる人々がパートナーシップを組んで取り組むことの重要性や、そのために中間支援組織が果たすべき役割などについて、地球環境パートナーシッププラザの須藤美智子さんから伺いました。

環境問題へのパートナーシップをめぐる現状について

私たち、地球環境パートナーシッププラザ(GEIC)では、平成8年10月にオープンして以来、持続可能な社会を構築するために、パートナーシップの場づくり、NPOの基盤強化、セクターを超えた情報交流などを主な活動としてきた。その間、情報公開や協働のしくみが各地で生まれ、各地域でパートナーシップを促進する拠点も増えている。しかし、地球規模での環境の悪化や、地域社会の衰退は進んでいる現状でもある。

国際的な環境問題の交渉の場においても、1990年代以降、NGO/NPO(以下NPO)の役割の重要性が改めて認識されているが、日本の状況を見ると、NPOが環境政策に参画するためにはまだまだ大きな障壁があり、情報へのアクセスや政策への参画が容易になるようなしくみづくりが求められている。

一方、企業においては、社会的責任がクローズアップされ、負荷の少ない製品づくりなど、重要な役割を担っているとの考え方が定着しつつある。環境や社会的公正の面で法令を遵守することはもちろんのこと、経営そのものにCSRを組み込むことが国際的な流れである。企業にとっては、環境問題に関してNPOや市民とのパートナーシップを強め、環境保護活動に積極的に貢献することで、より高い次元で社会的責任を果たすことが求められている。

より良い環境パートナーシップを実現するために

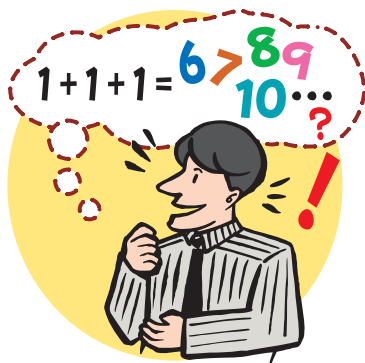
そうした状況のもとでの、パートナーシップの考え方や動機はさまざまであるが、私たちは次のように考えている。

持続可能な社会に向け、多様な組織や機関の連携や協働関係を進めるパートナーシップの重要性が認識され、さまざまな取り組みが進んでいるものの、「ただ、NPOと企業や行政と一緒に事業を行っている」にとどまっているため、パートナーシップが持続可能な社会に向けた動きを生み出せていない、パートナーシップを組むことが目的化しているという事例も少なくない。

そこで、異なる価値や役割を持つ主体が、パートナーシップを通じて、それぞれの主体の自己改革を促し、地域の資源や人材などが再認識されることによって、新しいパートナーシップを形成する相乗効果やそのプロセスに注目している。

単に資源や人材や時間を投入するだけでなく、協働のプロセスを通じて、課題解決につながるアイデアや手法が生み出されるといった実質的な効果があることこそが重要である。「1+1+1が3」ではなく、それぞれの1が変わっていくことで、6にも10にもなるようなパートナーシップが望ましいと考えている。

そのために、GEICでは、情報拠点同士の連携、多対多のパートナーシップ、パートナーシップのツール開発、コーディネーターの育成、パートナーシップの評価や分析など、ローカルでの取り組みを他のローカルへ反映させたり、グローバルな視点から比較するなどの取り組みを、果たしていきたい。これからの10年は「1+1+1=6」となるような「市民力の創出」を役割として、具体的で相乗効果のあるパートナーシップを社会に提示するような事業を進めていく役割を担いたい。



環境ボランティアの促進に向けて 中間支援組織が果たすべき役割について

GEICでは、環境ボランティアを、パートナーシップ・市民力の創出の基礎となる「自ら社会を変える」市民の、裾野を広げる」という視点でとらえている。

この10年で、ボランティアセンターに加えて、NPO支援センターなど、各地にさまざまな「つなぐ」役割の拠点ができた。「環境ボランティアを促進する」という視点でも、「つながり」を生み出すつなぎ役として、中間支援組織が果たすべき役割は重要となる。

例えば、NPOと市民をつなげる場合、もともと、環境保護活動への関心があり、積極的な参加を望む人を、NPOへとつなげることは比較的容易である。しかし、漠然とは気にしていながらも具体的な行動を起こすまでには至らない人たちを、活動と結びつけていくことが、今後、環境ボランティアの裾野を広げるうえでの鍵となる。

そのためには、NPOと市民とが出会える機会、知り合うための新しい場を、多彩に展開していく必要があるだろう。

また、NPO同士をつなぐことによって、個々のNPOが、それぞれに追い求めるミッションや、その取り組みの中で生まれる課題について具体的に話し合うことにより、思いもよらなかった解決法を見つけたり、その後の連携に発展することが期待できる。そのために、GEICでは、例えばボランティアのイベント開催時に、出展団体同士が意見交換をできるような機会を丁寧につくることによって、横のつながりを少しずつ広げる試みを行っている。

さらに、中間支援組織同士がつながることは、地域の課題を共通項としながら、環境と福祉といった、異分野の協働事業が生まれるなどの大きな成果をもたらす可能性もある。セミナーやイベントの開催を協働で取り組むことは、互いにノウハウなどの共有ができ、それぞれの負担が分担できるというメリットもある。

このように、中間支援組織は、さまざまな立場の人たちを積極的、戦略的につなげ、また、自らもつながることを意識しながら、ボランティアの裾野を広げていく役割を持っている。

そのうえで、コーディネーターには、それぞれの地域特性やニーズを踏まえ、活動そのものの継続性や人材面など団体の直面する課題を上手に支えながら、第三者的な視点をもったコーディネートを期待したい。

ボランティア・市民が環境活動にかかわるために大切なこと

環境をテーマとする活動に、興味をもった市民がかかわる際には、何よりもその活動を「楽しむ」ことが大切である。環境ボランティアは、自然を相手にする活動が多いこともあり、取り組みの成果が表れるには、長期的な視点が必要である。継続的な活動が求められるので、楽しく参加できることは大切だ。

さらに、環境について自分自身が抱えている「変だな」「おかしいな」と思った課題について、「自分自身が変わられるかもしれない」という意識をもってほしい。そして、それは一人ではなく、同じような課題を感じた誰かとつながることで、実現性をもった力となる。

世界的規模での重要課題となっている環境破壊をくいとめるためには、継続的に楽しく参加すること、そして同時に、既存の制度や規制を変え、地域をどう変えていくかという広い視野をもって、さまざまな人や組織がつながって、活動を広げていくことが求められる。